

Title	「らうくし」考
Author(s)	犬塚, 旦
Citation	語文. 1957, 19, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68514
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「らうくし」考

犬塚 旦

源氏物語葵巻の、

つれづれなるままに、只こなたにて、碁打、簾附などし給ひつ
つ日を暮し給ふに、心ばへのらうくしう愛敬つき、はかなき
たはぶれごとのなかにも、うつくしき筋をしいで給へば云々（
葵三七三。以下、対校源氏物語新釈本により頁数を示す）

のところに見える「らうくし」について、本居宣長は、玉の小櫛
七の巻に、

これは功勞の勞にて、俗言にいふ物事功者なる事也。こゝも碁
うちへんつきのしごまの、さどく功者なるよし也。さて又らう
たしといふ詞は、別にして、その意いたくかはれり、思ひまが
ふべからず。

と説いている。これに対し、島津久基博士は、この説明は一応當つ
ているが、なお検討する余地があるとして、自説を提出せられると
ころがあった。即ち、博士は「らうくし」には場合によって「ら
うたし」と弁別できにくいような用例も少なくないとされて、

一般に或事に対しての行為の場合、大略「勞々し」の義で釈
き得られるが（中略）顔容・声音・心性・挙動（態度）の場合

は、「勞々し」の意味の時もないではないにしても、寧ろ「愛
らしい」の義（中略）が當るやうであり、特に心性・挙動の場
合は恰も両者の中間に位置する如き心持の釈が最も妥當感を与
へるやうに思はれる。（中略）即ち愛らしい意味に功者の意味
の加はったやうな心持が、それらの文の「らうくし」の釈と
して最も適解として落ちつくやうに感ぜられるのである。かく
觀て来ると、「らうらうし」は單なる「らうたし」（可愛い）
ではない、少くとも可憐の意味よりもっと品位ある乃至は円熟
した愛らしさと解してよいのではないか。（中略）恐らく「ら
うたし」に知性的なものが含まった感じが「らうくし」であ
るやうに思はれて来る。

との見解を提示せられたのである。博士の説は、「らうくし」の
従来見のがされきたった意味性をつかれたものとして、たしかに傾
聴すべきものをふくんでいると思われるが、「らうくし」の意味
性格は、博士の説をもつてはたして満足されてよいであろうか。そ
こにはまだまだ検討さるべき問題がすどおりされてはいはしないであ
らうか。また、ときほぐされていない面が、なおのこされてはいは
ないであろうか。ここに、王朝期文学作品なかなしく物語・日記類
にあらわれた「らう」「らうくし」について吟味しなおし、史的
にあとづけつつ、「らうくし」そのものをとらえなおしてみよう

と企図する次第である。

二

王朝文学作品における「らうくし」の初見は大和物語(有朋堂文庫本)の一例あたりであろうか。同じく「らう」の語も、管見では大和の五例をもって初見とするのである。(勞あり三例) なお、「らうたし」の語もこの大和にはじめて一例姿を見せている。「らうくし」は故御息所の姉が、妹たちよりも歌をよむことが勝っていたことについて、「らうくしく」といっているのであって、「功者なる」という訳が一応まずあたることはみとめられるであろう。「らうあり」の方もすべて良岑宗貞、玉淵檜垣の御などに人に関して用いられ、而も「玉淵はいと勞ありて歌などよくよみき」(五二)と見えるごとく、この物語では歌をよみ情趣を解するといったふうの人物にばかり用いられているのであって、「をかし」と並用されて、「いとらうありをかしくて世を經ける」(二〇)とか「らうあり、をかしき人々あり」(七〇)とかと見え、「らうあり」には、そうした側面がつねにつきままとっていることを感じさせるのである。「らうくし」にしても、歌をよむことに関して用いられている点、やはり、そこに趣味性といったものとのつながりが思われるのである。とにかく、「らうあり」も「らうくし」も歌をよむことに関して用いられていることを銘記しよう。

つきに見られるのは宇津保物語(有朋堂文庫本)である。ここには「らうくし」は二十三例、「らう」(形名詞)四十例、うち「らうあり」三十六例(らうあるものがはかに例)、「勞す」(形動詞)三例が見られる。用例はかなりの多く、意味をたずねる上のがかりがいろいろと得られ

る。「らうくし」の方は、俊陰女(心)、あて宮(心)、忠こそ(心)、千蔭亡妻仁寿段の女御、仲忠、女三宮、あこぎ、宣耀殿(正明)、あて宮の御子、按察使の君、梨壺の宮の君、梅壺更衣、童二、嵯峨院(三女)などと人物に関して用いられることがほとんどであり、ほかには、贈物のつくり方、琵琶の弾き方、戸口の叩き方といったところで、すべて人ないし人の行為に関するものばかりであることは注意せられてよいであろう。そして、この語は「かたち」の「清ら」(二二)、「清げ」(二二)をかしげ、「光り輝き」(二二)、「眩ゆきまで」見ゆるのとならべて、「心」の「らうくしき」として用いられている場合がしばしば見える。即ち、「心」の「らうくしき」は「清ら」「清げ」をかしげ(二二)的外貌となつて発現される場合が多いのではないかの推測をいだしめずにはおかぬのである。この語が「をかしげ」「をかし」「愛敬つき」「白く」「花やか」(三三)、「今めき」等の語ともにしてしばしばあられてくることは印象的であり、とくに「愛敬つき」との親密な関係は見のがしえないものがあるようである。この両者が直接してあらわれること三回であつて、(なお「りやうくし」の例ではあるが、「いとふくらかに愛敬つきたる人の、髪長にて、いとりやうくしき」(四)、(五)、(六)、(七)、(八)、(九)、(一〇)、(一一)、(一二)、(一三)、(一四)、(一五)、(一六))というものもある。両者の間に何か濃いつながりの存することが察せられるのである。「愛敬づく」については別稿であらためてとりあげるはずであるが、すでにいくらかふれたものもあるので参照いただければ幸せである。とにかく、「らうくし」が人の外貌的属性を示す場合、あかるい華麗性を連想せしめるもののあることはみとめられるところといえようか。つきに宮の君はらうくしく、これはなまめかしくおはすめる。(楼の上)(上)・下六一六)

の例は、「らうくし」と「なまめかし」とを対照使用して注意せられるが、一方、

仲忠、夕ばえしてそこらの人にも似ず、勝れてめでたく容貌の清らかなるよりも、さし歩みたる様、うち思ひつるけしき、さらに人に似ず、なまめき、らうくし。(初秋上六四六)

のごとく、「なまめき」と「らうくし」が共存している場合もあるのであって、「らうくし」は「なまめく」「なまめかし」的世
界にも、そうでない世界にも顕現しうる性格を示すものであったと
考えられ、この点より云々することはしばらくひかえることとする
では、この語の本領はいずれに存するであろうか。まず、琴や琵琶
を「おもしろく」あるいは「をかしく」弾くことに關して「らう
くし」とつかわれていることは注意されていいであろう。

かたちもいとをかしげにおはすや。坊にも、内裏の宮、若宮よ
りは、この君をこそ。いとらうくしく故づきてぞ生ひ出で給
ひぬべかめり(國讓(中)・下四二五)

とも見えるごとく、この語には「故づき」といった性格をくみとる
ことがやはりできるのではなかるうか。

(あて宮) あるが中に容貌清らかに、御心らうくしく、今めき
たる御心にもあり、物の心も思し知りたれば、(藤原の君上一
〇二)

つまり、「物の心」を知る、趣味あり、情趣を解する、そういう能
力をも「らうくし」はつつんでいられるのはなかるうか。とにかく
この語には、「物事をよくこころえ、身につけている」聡明さとい
ったものが一貫してうかがえるようである。忠こそについて、

心のさとくらうくしきこと限りなし。(忠こそ上六一八)
といわれているさとさ・賢さといったものが、やはり、この語の意

味の中枢をなし、それが、この王朝時代の教養性といったものとの
連関よりして、多く趣味性の方向に意味づけられてゆくことになっ
たのではあるまいか。さとい心のはたらき、それが、外貌に、態度
に、動作にあらわれたのが、「らうくし」なのであって、主とし
て、趣味の方面において、このはたらきがとらえられて、当期の「
らうくし」の意味性を色づけるところがあったのではなかるう
か。したがって、心のさとさと趣味性が、宇津保の「らうくし
」を意味づけていると考えてはならないであろうか。而して、人物
の外貌の場合、ほとんどが、「愛敬つき」「清げに」「清らかに」「をかし
げに」「白く」「花やか」等々とあかるい華麗さをあらわす語と
ともに見えていることはやはり注意せられるべく、ほかには「なま
めき」と、「氣高くものくしき」(藤原(中)・各一回くらしいのも
のである。心理の場合は「さとく」とか、「物の心も思し知り」と
か、知性や情趣性に関するものである。以上で、宇津保物語におけ
る「らうくし」の用いられ方はたい見当がつかうかと考え
る。つきに、

賄うちなし給ふにも、いとらうくしう、まことに大将(兼雅)
相撲の事などおこなひ給ふにも、いと心深きらうの見ゆれば、
あやしく似たる人の心様にもあるかな、と御覽じて、(初秋上
六二四)

などに見ても、「らうくし」と「らう」とが、相似た内容性格の
ことばであることは察せられるであろう。「らうくし」はやはり
この「らう」を疊語にした形容詞であるともとめてさしつかえなさ
そうである。さて、「らう」はどのように用いられているであろう
か。「らうあり」の形で見えるものがほとんどゆえ、この形のもの
について主として見てゆくこととしよう。「らうあり」は、木工の

君、童べ、神南備の藏人、女、兵衛尉、兼雅二、仲忠、仲頼の少將の妹、女一宮、京人、人四等、人に閑して用いられることもっとも多く、ほかに、節会に閑し六回、相撲の準備、宣旨、手紙、贈物の品、細工二、模様、食物、さらに、螢の光や、秋の夕暮、所二など自然關係にまでわたっている。人ないし人為的な事物がほとんどであるが、自然關係の用例の見られることは注目に値しよう。まず、能力のすぐれていることを示すものに、

見知らば中らぬもの故、鳥立ちなば興醒めなむ。らうある兵衛尉まづ試みてむや。(初秋上五九八)

のごとき射に関するものもあるが、人間としての能力にはいろいろな方面がありうるわけであり、

たゞ此の世にいくばく、容面、らうある人のなかにも、勝れたる人、この二人こそはあれ(初秋上六一七)

こころの年頃……見所あること無かりつるに、然こそいへ、只今の大将たちの、例の人にたち勝りたる人にて心づかひせられけむいとらうあるかな。(初秋上六三一)

さらに、「情」の語とともに、

木工の君といふ人、らうあるものにて、「これを聞き知らぬ様なるは、いと情なし」とて(藤原の君上一一五)

らうある女の情あるが、(初秋上五九二)

らうあらん所にすあて、情あらむ草木、花ざかりにも、紅葉ざかりにもあれ、見所あらむ所の夕暮などありて(初秋上六二二)「かくてもものし給ふに、今宵この琴仕うまつる人、いとめでたき人なるを、朝臣なほ内膳につきて、この前の物すこし情づいてたゞ今ものせよ。菓物などいと興ある物をえらびて仕うまつれ」と仰せられければ、この君だちの手をつくして、らうありとある人、殿上人などして、手づから組にむかひて、まことの有識たち、三四十人して調じ出だしたる、殊にいと清らなり。

(初秋上六八五)

などと用いられ、「らう」と「情」との關係はまことに深いものがあるといわなければならぬ。「らう」は趣味的世界の能力としてとくに意味づけられるところがあるようである。

遊は少將にも優りたり。すべてせぬ業なく、らうありし人なり

(藏開(中)下一六五)

例の声をかへて弾けど、らうある人の御耳なればふと聞き知り

て(初秋上六四三)

など、「あそび」の世界に用いられているものもそうといえようし、細工物、模様などに関するものもそうであろう。そして、

勞ある物のかた、をかしき物の様など画いつけて(初秋上六九六)

六)

その組いとらうありて、いと珍らしくをかしき事ども組みすゑ

たる(初秋上六九六)

今めき、らうあらむもの(初秋上六八七)

など、「をかし」「今めき」などの趣味性に關係あることばとともにあらわれているものも、この線て解しうるものである。かくて「らうある秋の夕暮」(初秋上(六五〇)、「面白くらうある所にたのしび遊ぶ」(歌上(下)四五五)というの「風情ある」の訳語をあてうることとなるであろうし、節会の場合またしかりであろう。しかも「らうあり」という以上、やはりそのおくに、知性的な、すぐれた深みをひそませた「風情ある」であることはいうまでもなからう。以上、見きたつて藏開(下)冒頭部の涼の詞に、「田舎人」に対して「京人のらうある」と見えていることもうなずけようというものはあるまいか。そこには、都会的な、洗煉された知的たらしき、教養、趣味性といったものが看取できるように思われるのである。而して、その外貌的あ

らわれは、「らうありし人」について、

容貌も気近く、愛敬づきてぞありし。(蔵開(中)・下一六五)
と見えるごとく、いろいろの事に通じ、ねれて円熟し、かどのとれた、親しみある相をとってくるのではなからうか。「いとらうある組みす多」を「いとめでたくなまめき」といい、「らうありとある人」たちの調じ出したものを「殊にいと清らなり」などといっているが、いかめしい、冷い、近づきがたいふんいきを思わせるような用例はまず見あたらないようである。

落窪物語(有朋堂)には「らうくし」一例見え、

はじめの男君は十二にて、いと大きにおはすれば、宮仕へするともあやまちすべからず、かしこくおはすれば、春宮の殿上させ給ふ。書を読み給ふにも、さとくらうくしく心柄もいと賢ければ、若うおはしける帝におはしませば、遊敵に召し遣ひをかしきものに覚して(四六八)

とあり、その賢明な知的意味性は明白である。遊相手とされ、「をかしきもの」に思われるというのも、上乗の考察結果をささげこすられ、これにそむくものではない。

枕草子(岩波文庫)には「らうくし」四例、「らう」一例。「らうくし」は郭公のほかは人に用いて用いられ、

人の謎々合しける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらうくしかりけるが(百二十八段・中一三九頁)

のごとき、謎々に巧みなことを意味しているものであり、季の御読経の威儀師。赤袈裟着て、僧の文ども読みあげたる、いとらうくし(百四一段・中一五四頁。ただし古典全書本は「きらきらし」となっている。)

もまた、やはりそのものなれた熟練したようすをいっているものに

ほかならない。

大納言殿は物々しう清げに、中將殿はらうくしう、いづれもめでたきを見奉るに(九十三段・中六三頁)

のごとく、「物々しう清げ」と「らうくし」が対照的に用いられていることは、郭公の声に關して、

らうくしう愛敬づきたる(三十九段・上一六五頁)

といわれていることとともに、感覚的用法における「らうくし」の性格を示唆しているところがありはしないであろうか。なお、ほかに「りやうくし」の形で見えているものもあるが、「らうくし」と同様に解してさしつかえないと思われる。墨の久しくつかわれたのを「らうおほきに成りたるが」としても用いている。

以上の考察をかえりみつつ、以下、源氏物語の用例について、さらに検討を加えていってみよう。

三

源氏物語では、さすがに、この語の用例数は、王朝作品中最高を示している。「らうくし」湖月抄本三十五例、河内本三十三例。「りやうくし」河内本に一例。「らう」湖月抄本十四例、河内本十三例。(湖四例、河五例)ほかに「らう気」一例。以上が管見に入れるすべてである。やはり、人物に関するものがほとんどであり、なかんずく紫上がもつとも多く、八例(心は五例)ほかに紫上の書についても一例見える。つぎは臘月夜・玉鬘・中君の各二回、なお、中君にはほかに書についても一回用いられ、玉鬘の姫君・同中君・明石上心おきて・明石姫君・中將の君・宇治大君・六君・匂宮心・按察大納言心・藤中納言(十才の時・湖)、權の書等に各一回用いられ、藤壺

は「もて出でてらう／＼しき事も見え給はざりしかどいふかひもあり

て思ふさまに」として、雲居雁は「いふかひあり、すぐれたるらう

／＼しきなど物し給はぬ」として、浮舟の書に關して「殊にらう／＼

しき節も見えねど」として用いられている。ほかには琵琶を弾くこ

とや祿の綿について用いられているくらいのものである。右に見て

も、「らう／＼し」が、物語中、主要な女性と多く重なっているこ

とに気づくであろう。この語は人の美としていちじるしく、なかん

づく、女性美として独自の意義をしめることを想像せしめずにはお

かぬのである。而して、紫上にもっとも特徴的な性格であつて、

ついで玉鬘・隴月夜に使用率の高いことは、とくに、紫上と玉鬘は

河海抄のいわゆる「いづれも心ざまよき人」であり、わたくし自身

別に論じたこともあるごとく、作中、女性としては「めでたし」の

評語をえている回数もっとも多く、(玉鬘七)、また女の本といったお

もむきがうかがわれるのであつて、而も、そうした紫上にぬきんで

ておびただしく用いられていることは、この語の並々ならぬ価値性

に由来するものといえるのではなからうか。ます

(き方はをさ) (河内本以下同) (な) (らう

らう／＼し) (かどめきたる心はなき) (な) (き) (な) (めり) (いと) (ら

たげにおほき) (か) (か) (こめかし) (おほき) (な) (ら) (む) (こ) (そ) (ら) (う) (た) (く) (は) (あ

る) (べ) (け) (れ) (末) (摘) (花) (二) (四) (一)

男君だち、十なるは殿上し給ふ。いとうつくし。人にほめられ

て、かたちなどよいあらねど、いとらう／＼しう、物の心や

う／＼知り給へり。次の君は八つばかりにて、いとらうたげに

姫君にも覚えられたば、(真木柱二〇一)

姫君はらう／＼しく深くおもりかに見え給ふ。若君は、おほど

かにらうたげなるさまして、(橋姫五)

など見てくると、「らう／＼し」と「らうたげ」とはやはり、対照

的な語であることがしられるのである。同じ可憐美でも「うつくし

」は陽性をおび、「らうたし」は陰性をおびていることについては

すでにふれたことがあるが、「らう／＼し」は他の用例など見くら

べる時、この場合、むしろ「らうたげ」の幼さ・陰性等の傾向と相

対するところがあるのではなからうか。(あかるい華麗なおもむきをなしや

すくまた「らう／＼しきものから、若うをかし」(葉三三三)「御手、こまやかにはあら

ねどらう／＼しう、草などをかじうなりにけり。まして朝顔もねびまさり給へらむかし

とおもひやる」(賢木四一七)などは「らう／＼し」の幼少性に対する性格を示して、いよ

さて、まず「らう／＼し」が「かど」などと親近性をもつ、知的性

格をおびるものであることは、

らう／＼しきたどりあらむも賢きやうなれど (若菜上三七四)

心及ばぬ事はたをさ／＼なき、人のらう／＼しきなれば (藤裏

葉二六三)

何事にもらう／＼しうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き

心もいとよう見知り給ひながら (幻三二二)

かど／＼しうらう／＼しう、匂ひ多かりし心ざまもてなし言の

葉のみ (幻三三一)

さるはこの君しもぞらう／＼しくかどある方の匂ひはまさり給

へる (総角一三四)

等が証しようし、高い知性的な香気、深い教養といったものを思わ

せる用法も見られるのである。しかも、そうした賢明さが趣味の世

界に発揮されること多く、

なほ／＼しきあたりともいはず、いきほひに引かされて、よき

若人どもつどひ、装束有様はえならずとのへつつ、腰折れた

る歌合物語、庚申をし、まばゆく見苦し、遊びがちに好める

ちなむいみじかんなる」など、をかしき方にいひなして、心を
尽しあへるなかに（東屋三）

内侍のかみこそは、らうくしく故々しき方は人にまさり給へ
れ。（種二八九）

いとさとくて、難き調子どもを、ただ一わたりに習ひ取り給ふ
大方らうくしうをかしき御心ばへを、思ひし事かなふとおぼ
す。（紅葉賀二九二）

琵琶こそ女のしたるに憎きやうなれど、らうくしきものに侍
れ。今の世にまことしう伝へたる人、をさく侍らずなりにた
り。（少女三一）

など、いずれも、そうした方向につかわれた例どもであろう。「を
かし」「をかしげ」がしばしばともなわれるのもこれと関係があら
う。さて、「らうくし」は「愛敬つき」「二なつかし」「二うつ
くしげ」等をともなつて親愛的傾向を示すうちにあつて、

御方の御心おきての、らうくしくけだかくおほかななるもの
の、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬなどを、
ほめぬ人なし。（若菜上三五七）

色あひ、あまりなるまで匂ひて、物々しくけだかき顔の、まみ
いと恥かしげにらうくしう、すべて何事も足らひて、かたち
よき人と云はむに飽かぬ所なし。（宿木二五八）

いとらうくしく恥かしげなる気色も添ひて、さすがになつか
しう言ひこしらへなどして出だし給へる程の御心ばへ（宿木二
六九）

など、「け高し」と並用され、あるいは「なつかし」に対すること
くであつてやや例外的な用法を見せている。そこには、教養にうら
づけられた思慮ぶかい人の、あるいはとどのいたらいたる人の、心
にくい知性美の側面を印象せしめるものがある。また、はなやかな
ふんいきの中に見えているものもある。「愛敬つき」「うつくしげ」

の場合もそうだが、「花やか」と並用されたり（紅梅三六七）、「ら
うくし」き姫君（玉鬘長女）を「匂ひやかなる」ともいっている
（竹河三九八）。以上かえりみて、「らうくし」はやはり、その賢
明な知的性格と趣味性とがとくに濃厚であり、そして、どちらかと
いえば、親愛的な、あかるいふんいきをとりやすい傾向にあること
をもあきらめえたかと思う。紫上について、

世の中にさいはひありめでたき人も、あいなる大方の世にそね
まれ、よきにつけても心の限りおごりて、人のため苦しき人も
あるを、怪しきまですずるなる人にもうけられ、はかなくし出
で給ふ事も、何事につけても、世にほめられ心にくく、折節に
つけつつ、らうくしく、ありがたかりし、人の御心ばへなり
かし。（御法三一七）

紫の御用意気色の、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で
見え聞えたる所なく、静やかなるを本として、さすがに心うつ
くしう、人をも消たず、身をもやんごとなく心にくくもてなし
添へ給へる事と、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられ
ける。わが御北の方も、あはれとおぼす方こそ深けれ、いふか
ひあり、すぐれたるらうくしさなど、物し給はぬ人なり。（
若菜上三七八）

と見えているが、これら、源氏および夕霧を通して見られた紫上こ
そは、まさに「らうくし」のもっとも高い円熟した姿を示すもの
と評されてよいであろう。源氏は、亡き紫上の「かどくしうらう
くしう、匂ひ多かりし心ざまもてなし言の葉のみ、思ひ続けられ
」（幻三三）て涙を流している。そこには、先天的なものとは後天
的なものとのめぐまれた結合によって創り上げられた玲瓏の円熟美
が光っている。

源氏物語の「らう」については、河内本の方に見えるものに、雲

居雁に關し、

らうありけだかきさまは知らず、いとらうたげにて(常夏八三)と、やはり「らうたげ」と対照的に用いられているのがあらし、玉鬘が「かどくしくらうありて」結婚についてりっぱに身を処したことを「いかにかどある事なりけり」と源氏をして思わしめている(若菜下九八・九)。「かど」との親縁性はおおえず、やはり、ねれた、賢明な知的態度というものを印象せしめられる。なお、「らうあり」は玉鬘に二回、柏木に關して一回用いられている。

つぎに紫式部日記(有朋堂)の用例を見てみよう。すべて三例であるが、宰相君と宰相君(北野三位の女)と彰子中宮との場合であつて、

いとをかしげに髪など常よりつくりひまして、容体もてなし、らうくしくをかし。ただちよき程に、ふくらかなる人の、顔いと細かに、匂をかしげなり。(三六〇)

ふくらかにいと容体こめかしう、かどくしきかたちしたる人の、うちゐたるよりも、見もてゆくにこよなくうちまさり、らうくしくして、口つきに恥しげさも、匂ひやかなることともそひたり。もてなしなど、いと美々しく、はなやかに見え給へる。心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、又いととはづかしき所そひたり。(三六一)

などに見え、「かどくし」との親縁性のほども思われるが、島津博士もいわれるごとく、一見しては「かどくしき」容貌という印象をうけるが、よく見てゆくと「こよなくうちまさ」って、「らうくしく」眼にうつってくるというのであって、「らうくし」は「かどくし」よりは一段上位の美感をあたえることばであったと思われる。「をかしき」・華麗さ・「はづかしげさ」といった印象が、右の例にはうけとれるのである。中宮彰子の「御心あかぬ所な

く、らうくしく心にくく」たしなみぶかい資性についても記されている(三六七)。

四

源氏物語以後では、狭衣物語(有朋堂)「らうくし」五例(ほかに「りやうくし」一例)、堤中納言物語(古典全)「らうくし」一例、榮華物語(日本文学)「らうくし」六例、大鏡(改造文)「らうくし」二例、「らうあり」一例。以上が管見に入っている。これらについて概観してのち、結論にゆきつくことしたい。

狭衣物語では、一品宮に關して三回、狭衣に關して一回用いられているが、飛鳥井姫君について、

わざとけだかく誠しきよりは、中々様かはりたる打解などより始め、物はかなげにらうくしからぬもてなしなどの、怪しきまでらうたく。(六三)

と見え、やはり「らうたし」と対照的性格をおびていることがうかがわれるのである。狭衣については、

もてなしけはひは、飽くまで気高う恥かしげになまめかしくて御顔はこまかに美しげにらうくしく、愛敬つき給へるにほひは、誠にはなくと、あたりまで匂ひみち給へるなど、所かへて見奉るは、又光ことにめでたく見え給ふ(一四七)

とあって、かれはさまざまな面を取集めかねそなえた美しきにかがやいている。一品宮については、その「まみいと恥かしげに、らうくしく清げ」(三〇〇)であるとか、その「目尻」が「らうくしげ」(三〇二)であり、あるいは「恥かしげにらうくしげ」(四七一)で、煩わしい氣持をいだかせるとしてえがかれている。

堤中納言物語のは、少将(三位中将の誤か)の「らうくしく愛敬づき」ているのに対して、中納言は「なまめかしく恥かしげなる」としてえがかれていゝものである。(逢坂越えぬ権中納言六三)

榮華物語は、道兼、道長、三条院(三回)、一品宮(皇子)に關して用いられ、道兼も道長も「らうくしうをくしう」あつたと見えるが、道兼の方はさがなく、道長の方は、道心もあつて、人を思いかえりみ、はぐくんで、人望あつたことがのべられている。三条院については、「らうくしく」、「をかしう」「今めかしう」

「恥かしげ」で、「何事もはえある様に坐ば、万もてはやし思し召したり」(二四一)とある。一品宮は「花々と盛りに桜の咲きこぼれたる心地して、氣高く匂ひらうくしく今めかしう、をかしげなる」御有様であつたという(六一八)。以上、榮華の用例も、道兼のは老獮なかんじをあたえるが、すべて、知的な、あるいは趣味を解する、あるいは華麗性をおびた意味あいを印象せしめられる。

大鏡には、選子が「いとに、らうくしく」あられたこと(一四七)、行成が「すこしいたらぬことにも、御たましひのふかくおはして、らうくしくしなし給ひける御根性」(一七五)であつたことがのべられている。「らうあり」の方では、玉淵が「いとらうあり」で、歌など上手によんだと見えている。

以上、ごく大ざっぱな概観になつてしまつたが、「らうくし」は紫上や中宮彰子などにそのもつとすぐれた高度なあらわれを見せ、道兼あたりに、もつとも低次の相を示しているかと思われ、いずれにせよ、その知的なとき、賢さといったものは、いずれにも一貫して見られるところであり、かつ、それが趣味の世界に發揮されること多く、而して、全体としては、どちらかといえば、親愛

感を人にいだかせ、華麗な外貌をとりがちな傾向にあることもいへようかと思う。けだし、人格を、生活態度を、容姿を、時代理想の規準へと高めてゆくための知的營為、教養といったものが、そしてその結果が、「らうくし」という相をとつて具象されていったのではないか。かくして、そのもつとも高い達成をとげたのがまさに紫上であつたと考えられるのである。島津博士のごとく「らうたし」に知性的なものが含まれた感じが「らうくし」であるとするこゝには、なお問題があるのではなからうか。「らうくし」はあくまで「らうくし」であつて、その知的營為が時代規準に向つて發揮されてゆく時、この時代の理想美と、結果としてかさなつてゆくことになりうるまでであつて、当時愛好された美が「なまめかし」であり、「清ら」であつたことよりして、すべては、おのずとそうした目標へと志向され、みがき上げられてゆくことになつたのではなからうか。「らうたし」はいうまでもなく、「なまめかし」系に屬し、湿性をおびた可憐美をあらわすことばであつた。「らうくし」が近接を示したのは、同じ「なまめかし」系でも、むしろ、あかるい傾向をおびたものであつたのであつて(愛敬づく、うつくし等)、むしろ「清ら」的なそれにかたむいていたというのがより事実に近いのではなからうか。思うに「らうくし」がこの時代にとつてもつともぞましい発現のかたちをとる時、おのずから、それは時代の理想美の中にその座を見出してゆくことになつたといえよう。島津博士のごとく説くことは誤解をまちびくおそれなしといないのである。ただ、この語にどのような漢字をあてたら適當かといふことについては、博士もいわれるごとく、「良々」も「芳々」も後世的な考え方からの宛字にとどまるのではないかと考えられ、い

まともに適切と思われるものも思いあたらない。本稿においては、さらに、「かど」「かどくし」についても検討する予定であったが、紙幅の都合で稿をわかっこととした。ただ、「かどくし」が「うるはし」系に位置して、情味にとほしく、ものものしい感じをともなうことのみ記しておく。「かどくし」の究明はやがてまた「らうくし」の理解を助けるところが多いであろうと思われる。

(昭和三一・三・二稿了)

註

(一)島津久基博士「らうくし・らうたし」(「国語と国文学」第二十一巻第九号、「国文学ノート」所収。なお、同博士著対訳源氏物語講話(6)葵の二九五頁から三〇六頁にわたってのべられていゝ)。

(二)拙稿「清ら・清げ私見」(芸林第六巻第四号)。

(三)同「句ふ」「句ひやか」「花やか」考(「平安文学研究」第十五輯)。

(四)同「今めかし考」(国語国文第二十巻第三号)。

(五)同「源氏物語の『うつくし』と『らうたし』」(平安文学研究第十一輯)。

(六)同「なまめかし考」(芸林第三巻第三号)。

(七)同「ゆゑ」と『よし』(未発表)。

(八)同「あて付け高し」(ばんせ第二十三号)。

(九)同「源氏物語における理想美の問題」(芸林第五巻第二号)および「源氏物語の華麗美―今めかし―追考」(昭和二十八年十一月三日京都大学国文学会研究発表会発表)。

(一〇)註五参照。

(一一)註三参照。

(一二)拙稿「源氏物語における理想美の問題」。

—京都府立嵯峨野高校教諭—